

派遣者番号	R5K29	氏名	宮崎 友美子
研究主題 —副主題—	小学校国語科における対話的な学びを通して育成する「言葉の力」		
派遣先大学	早稲田大学	指導担当者	遠藤 真司
所属	荒川区立第三日暮里小学校	所属長	村山 貞則

キーワード： 言葉の力 言語能力 対話的な学び 一貫した問い

要旨： 小学校学習指導要領（平成29年告示）には、学習の基盤となる資質・能力の一つに、「言語能力の育成」が挙げられ、国語科を要として身に付けた言語能力を各教科で充実させることが求められている。そこで、言語能力育成に向けて必要不可欠である対話活動を充実させ、児童の「言葉の力」を高めていくための方策を探り、その効果を検証した。実習対象校の課題を基に、「話すこと・聞くこと」の単元から「読むこと」の単元へ関連させた授業を構成し、対話的な学びを充実させたことで、児童の対話への意識を高め、話す力、聞く力を向上させることができた。また、教材文を通して考えたい「一貫した問い」を児童自身が設定し、単元の初めから最後まで継続して問い続けてきたことで、対話の必然性が生まれ、児童の主体的に学習に取り組む態度が醸成された。国語科で習得した「言葉の力」を、他教科においても幅広く汎用できるように、他教科との関連を意識したカリキュラムや教育課程を編成していくことが今後の課題である。

1 課題設定の理由とその背景

1-1 問題の所在

小学校学習指導要領（平成29年告示）には、学習の基盤となる資質・能力の一つに、「言語能力の育成」が挙げられている。そして、「言語能力育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること」と記されており、国語科で学んだ言語能力を各教科等で充実させることが求められている。また、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会による「言語能力向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」では、「言葉は、学校という場において子供が行う学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるもの」とし、「言語能力の向上は、学校における学びの質に関わる重要な課題」とされている。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、マスクを着用し、互いの表情を見ながら顔を突き合わせて自分の思いを言葉で伝え合う経験を十分に積み重ねることができなかつたことにより、積極的に他者と関わろうとすることに対する抵抗感をもつ児童も少なくない。その影響もあってか、令和4年度全国学力・学習状況調査では、小学校国語科「話すこと・聞くこと」において、「互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、自分の考えをまとめること」が課題として挙げられた。そして、その改善には、「様々な視点から検討し、互いの意見の共通点や相違点、利点や問題点をまとめる等の話し合い活動を充実させる」ことの重要性が指摘され、再び言語能力育成に向けた授業改善が求められている。

そこで、言語能力育成の要となる国語科の対話活動に重点を置き、対話的な学びの充実を通して児童の「言葉の力」を育成していくことを本実習のねらいとした。

1-2 実践対象校の状況と課題

実践対象校である公立小学校では、学校図書館を活用した授業研究に取り組み、学校図書館活用を中心にすえた教育課程の編成を行っている。児童の読書環境が充実していることもあってか、令和4年度に実施した児童の読解力や語彙力を測るための「Reading-Test（数研式 読書力診断検査）」では、読解力、語彙力のどちらも全国平均を上回る結果が出ている。しかしながら、授業や生活場面での児童の対話を聞いていると、決まった言葉を使う傾向が強く、実際に獲得した語彙を活用できているとは言い難い現状にある。

実践の対象とする第4学年は、自分の考えを表現することに対する意欲が高い児童が多くいる。一方で、話し合い活動の場面になると、他者の考えには関心がもてずに耳を傾けられなかったり、互いが自分の考えを主張するあまり口論になってしまったりするといった様子が見られ、聞くことに対する課題が挙げられている。

第5学年においては、穏やかで素直な児童が多く、協調性はあるが、自分の考えに自信がもてない児童の割合が高い。そのため、授業中の発言や話し合い活動の場面では、特定の児童の発言に留まってしまい、学級全体が発言する少数の児童の考えに流されてしまう傾向にあることが、授業観察の様子から見えてきた。

2 研究の方法

2-1 課題に対する理論的検討

鎌田（2017）は、『言葉の力』は、表現力だけでなく、表現の基になる個人の「内面世界」をも現すとし、「その個人の言葉の限界は、その個人の『内面世界』の限界であるともいえる」と述べ、「内面世界」を広げることの必要性を指摘している。そのためには、自分が精一杯悩んだ末の答えである「自分解」をつくり出すことが求められ、それを磨く手段として、対話・交流を挙げている。上山（2021）は、対話を通して「学習者自らが自分に分かる言葉で考えを言語化することで、初めて自分の考えを整理することができる」と述べている。さらに、秋田（2009）は、「言語力のなかでも、「話す、聴く」という行為は、すべての教科を通して授業の中で交わされる言葉のやりとりを通して育成されている」と述べ、梶田（2017）は、「教育場面では、他者と対話をすることが、学習者個々人の内面における『自己内対話』へと進化し、発展していく」とし、そのためには、「他者の考えに耳を傾け、それを受け入れながら自分の考えを整理し直す」ということの練習が不可欠だと述べている。言語能力

を育成する上で、対話活動を積み重ね、話す力・聞く力を身に付けることの重要性が示された。

しかしながら、対話活動を積極的に取り入れることのみをもって「言葉の力」の育成につながるというものでもない。実際、白水（2020）は、対話には参加する人の考え方を少しずつ変えていく「建設的相互作用」を生む力があると述べた上で、「建設的相互作用が起きる鍵は、その場の参加者に、お互いの考えの『違い』が見えること、そして、参加者がその違いをまとめて答えを出そうとすること」であるとし、それは、「参加者たちが『解いてみようか』『やってみようか』と思える問題があつて可能になる」と述べている。対話には、必然性が欠かせないこと、必然性を生むためには、そのための問いが重要であることを示している。

その問いに対して、遠藤（2021）は、「一貫した問い」を提唱し、「一貫した問いを設定することにより、考えるべきことが明確になり、子どもたちの対話が促進され、学習に主体的となり、より深く考えるようになる」と述べている。それが、児童自らが考えた問いであるならば、一層対話的な学びが充実することが期待できる。

これらのことから、児童に全ての教科等で生かしていくことができる「言葉の力」を身に付けるために、言語能力育成の要である国語科の学習を通して、対話的な学びを充実させた授業実践を行っていく。

3 実践の方法及び成果の検証方法

3-1 実践の概要

- ・対象学級：都内公立小学校 第4学年 3学級（86名）、第5学年 2学級（65名）
- ・時期：2023年10月中旬～11月上旬
- ・教科：国語科

3-2 実践計画

児童の「言葉の力」の育成に向け、国語科の「話すこと・聞くこと」における単元と「読むこと」における単元を連続させた授業実践と、朝学習の時間を活用し、「ミニトーク」の実践を行う（表1・表2）。

(1) 第4学年の実践

【単元名】「よりよい対話の仕方を考えよう～対話の達人への道～」（全4時間）

「登場人物の気持ちの変化を中心に読み、考えたことを話し合おう」（全8時間）

【教材名】「あなたなら、どうする」（光村図書4年上）

「プラタナスの木」（光村図書4年下）

【指導計画】

表1 指導計画（第4学年）

「よりよい対話の仕方を考えよう～対話の達人への道～」（話すこと・聞くこと）		「登場人物の気持ちの変化を中心に読み、考えたことを話し合おう」（読むこと）	
主な学習活動		主な学習活動	
1	・これまでの対話活動を振り返り、学習の見直しをもつ。	1	・初発の感想を交流する。
2	・立場を変えてやり取りを行うことを通して、それぞれの立場の感じ方を知る。	2	・登場人物と内容の大体を把握する。
3	・前時の気付きを基に、再び場面での対話活動に取り組み、その違いについて検証する。	3	・「一貫した問い」を決め、学習計画を立てる。
4	・単元の学習を振り返り、話し手・聞き手の立場から、今後の対話活動で意識したいことを考え、新たなめあてをもつ。	4	・学習計画に沿って「一貫した問い」の解決に向け、人物の心情の変化を読み取る。
		5	
		6	
		7	・「一貫した問い」に対する自分の考えをまとめ、話し合う。
		8	・単元全体の学習を振り返る。
【朝学習】 ミニトークの実施（15分間 全3回）			
・対話活動での自分のめあてを意識しながら、トークテーマに沿ってペアやグループでの対話を行う。			

(2) 第5学年の実践

【単元名】「よりよい対話の仕方を考えよう～対話の達人への道～」(全4時間)

「伝記を読み、自分の生き方について考えたことを交流しよう」(全10時間)

【教材名】「やなせたかしーアンパンマンの勇気」(光村図書5年)

【指導計画】

表2 指導計画 (第5学年)

「よりよい対話の仕方を考えよう～対話の達人への道～」(話すこと・聞くこと)		「伝記を読み、自分の生き方について考えたことを交流しよう」(読むこと)	
	主な学習活動		主な学習活動
1	・対話活動を振り返り、学習の見通しをもつ。	1	・初発の感想を交流する。
2	・拡散型の話合い活動に取り組み、互いの考えを比較しながら自分の考えを広げ深める。	2	・人物に起きた出来事を整理する。
3	・収束型の話合い活動に取り組み、互いの考えを取り入れながら考えをまとめる。	3	・「一貫した問い」を決定し、学習計画を立てる。
4	・単元の学習を振り返り、話合いを行う際に大切にすべきことを考える。 ・今後の対話活動で意識したいことを考える。	4	・「一貫した問い」の解決に向け、教材文を読み、人物の生き方や考え方についての自分の考えをまとめる。
		5	
		6	
		7	・「一貫した問い」に対する考えを交流する。
		8	・他の人物の伝記を読み、人物の生き方や考え方から感じたことや考えたことをまとめる。
		9	
		10	・「一貫した問い」に対しての考えを交流する。 ・単元全体の学習を振り返る。
【朝学習】 ミニトークの実施 (15分間 全3回)			
・対話活動での自分のめあてを意識しながら、トークテーマに沿ってペアやグループでの対話を行う。			

3-2 方法

児童の話合いに対する意識や取り組み方の変化について検証するために、実践の前後に質問紙調査を実施した。質問紙には、実践前後共通の22項目の内容と、実践後のみ、授業の感想及び意識変化について5項目を追加し作成した。回答方法は、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」から選択する四件法と、自由記述を用いてその理由を調査することとした。これらの実践前後の質問紙調査の結果の変化を比較することに加え、授業観察、ノートや振り返りの記述内容を合わせて検証する。

4 実践内容

4-1 朝学習「ミニトーク」の実践

対話の基盤となる、他者とコミュニケーションを図ることの楽しさを実感し、対話活動に対しての抵抗感を軽減するため、朝学習の15分を活用して「ミニトーク」を各学級3回ずつ実施した。「ミニトーク」には、河村(2002)が、自己開示による関係づくりに重点を置いたエンカウンターを考えをベースに開発した「構えない一体感を味わうエクササイズ」のワークを用いた。自分の好きなものや苦手なものをテーマとし、回答を二者択一にすることで、自分の考えをもちやすく、さらには相手の考えや理由を比べながら聞きやすくなるようにした。

4-2 「話すこと・聞くこと」における単元の実践

第1時では、日頃の対話活動において児童が課題に感じていることを共有し、話し手・聞き手としての課題を明確にした。その上で、課題解決に向けてどのように学習を進めていけばよいかを考え、計画を立てた。

第2・3時では、実際に対話活動を取り入れた。第4学年では、日常生活のある場面でのやり取り、第5学年では、収束型、拡散型の話合いを通して、他者の考えに触れることで自己の考えに広がりや深まりが生まれることを実感するとともに、話合いを進めていく上で大切な点に気付くことができるようにした。

第4時では、単元を振り返り、対話の際に大切だと気付いたことを共有し、その中から自分が特に意識していきたいことを今後のめあてとして設定した。さらに、話し手や聞き手として、学級全体で意識していきたいことを「対話のポイント」としてまとめ、学級に掲示した。

4-3 「読むこと」における単元の実践

(1) 「一貫した問い」の設定

第1時には、児童が教材文を読み、心に残ったことや疑問に感じたことを初発の感想として書き、交流を行った。第3時では、それらを一覧にして学級全体で共有し、それぞれが教材文を通して抱いた疑問を分類していく中で、最も児童が考えたい問いを一つ選び、単元を貫く「一貫した問い」として設定した。

児童から出されたその他の問いは、「一貫した問い」に対する考えをまとめていくために必要なステップとして、第4時からの学習課題として設定した。そのために、「一貫した問い」を設定した第3時で、まず自分の考えを書き記しておき、第4時からの学習でも学習の終わりには、必ず「一貫した問い」について取り上げ、自分がどのように考えているかについてまとめる時間を設け、その変容を残しておくようにした。

(2) 話し合い活動の設定

第4時から児童が設定した問いに対する読みを深めていくために、3～4人の小グループでの話し合いと学級全体での交流の時間を設けた。まずは、個人で読み、自分の考えをもってから小グループでの話し合い、全体での交流、個で自分の考えを見つめ直すといった流れを基本としたが、各学級の実態や児童の思いに沿って適宜変更しながら進めるようにした。その際には、「話すこと・聞くこと」の単元の学習で扱った「対話のポイント」についても確認し、意識して話し合い活動に臨むことができるようにした。

5 結果

5-1 授業観察に見られた児童の変容

実践前の対話活動では、意見のぶつかり合いから口論になったり、特定の児童しか発言しなかったりしていた様子が見られたが、相手の考えを聞いて「なるほど」「そういう考えもあるね」と相手の考えを受け入れながら反応したり、「ちょっと自信がないんだけど」「ここまでしか分からなかった」と自分の考えが明確になっていなくても、発言したりする児童の様子が見られるようになった。また、話し合いが行き詰まったと感じたときに「対話のポイント」の掲示を見ながら、話し合いを進める児童の姿も見られた。

更に、はじめは、学習計画に沿って個人読み→グループ交流→全体交流→考えの再構築といった流れを教師が提示し学習を進めていたが、「〇〇についても考えたい」と「一貫した問い」の解決に向けて新たな問いが生まれたり、「今、話し合いたい」「少し自分で考えたい」と学習の流れや方法を児童が選択したりする場面が増えた。

5-2 ノートへの記述、振り返りの内容から見られた児童の変容

児童のノート記述からは、「はじめは～だと思ったけれど、～という考えに変わった」「やっぱり～だと思った」というように、交流前の自分の考えと比較し、自分の考えがどのように広がったり深まったりしたかが分かる記述が増えた。また、自分の考えに特に影響を及ぼした友達の発言を記述する児童の姿も見られるようになった。

学習の振り返りには、「友だちの考えをちゃんと聞くと、新しい発見があって、もっとみんなと話したいと思った」「友達が、私が思いつかないようなことをいくつも言っていて、なっとくすることがいっぱいあった」「みんなのいいと思った考えをぬき出しつなげたら、もっといい考えになった」など、対話活動を通じた自分の考えの広がりや深まり、変容を実感している記述が見られた。

5-3 質問紙調査の結果から見られた児童の変容

他者の考えに耳を傾けることに課題があった第4学年では、実践後、友達の考えを聞くことに対して前向きにとらえている児童の割合が増えた(図1)。その理由として、肯定的な回答をした児童は、「自分では思いつかないことを考えている友達がいて、楽しいから」「自分の考えと同じ人がいると嬉しいから」だと挙げ、他者の考え

に触れることによさに関する記述が見られた。一方で、前向きになれないと回答した児童は、「友達が話していることがよく分からない」「友達の考えを聞いても自分の考えは変わらない」ことを理由として挙げている。

自分の考えを伝えることに課題があった第5学年においても、話し合いの際に自分の考えを伝えることに対して、肯定的な回答をしている児童が増えた(図2)。肯定的な回答をした児童は、「友達が自分の考えに納得してくれて嬉しかったから」「と中でも友達が一緒に考えてくれたから」等、相手の聞き方や話し合いの進め方の様子を理由として挙げている。一方で、否定的な回答をした児童の中には、「考えたけれどよく分からないから」「自分の考えに自信がないから」といった、話し合いに至る前の問いに対する自分の考えをもつ段階に理由が見られた。

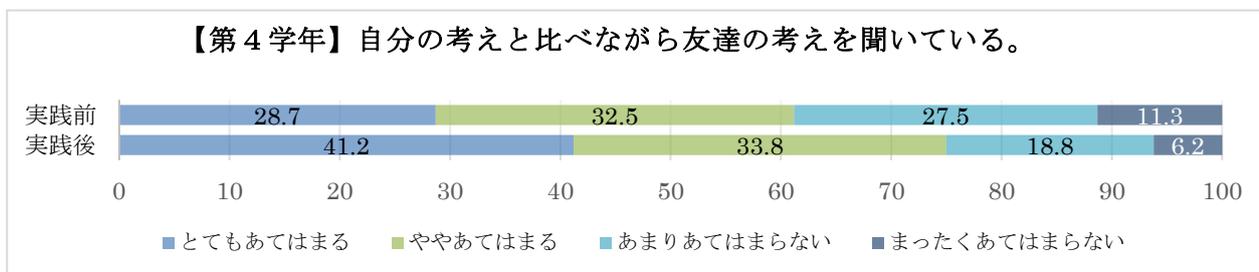


図1 【第4学年】対話活動に関する意識調査の結果(一部抜粋)

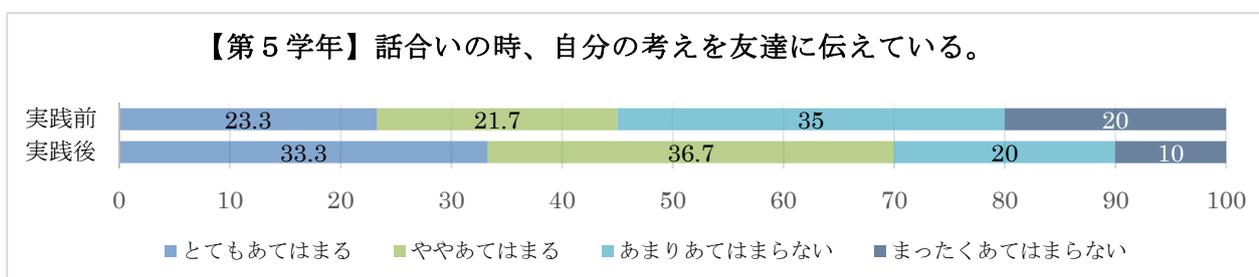


図2 【第5学年】対話活動に関する意識調査の結果(一部抜粋)

6 考察と今後の展望

授業での対話活動の様子やノート・振り返りの記述、質問紙調査の結果から、対話の際に気を付けるべきことを明確にし、一つの単元での学びを意識しながら次の単元の学習で対話活動を積み重ねていったことで、児童の対話への意識を高め、話す力、聞く力が向上したと考えられる。また、教材文を通して考えたい「一貫した問い」を児童自身が設定し、単元の初めから最後まで継続して問い続けてきたことは、児童の主体的に学習に取り組む態度が醸成され、自分の考えを広げ深めていくために有効であったと考えられる。これらのことから、児童が話し合いたい、考えたいと思う問いやタイミングで対話活動を設定し、話し方・聞き方のポイントを意識しながら対話的な学びを充実させることは、児童の「言葉の力」を育成する上で重要であることが明らかになった。

その反面、問いに対して自分の考えをもつことに難しさを感じる児童や「一貫した問い」ではない他の問いに対しての関心が高い児童もおり、問いの設定の仕方については再度検討が必要である。今後も話し合いを積み重ねていく中で、対話の目的や視点、方法をより明確にすること、話し合いによって自分の考えがより確かになることもまた考えの広がりや深まりであることを児童が実感できるようにしていくことも必要であると考えられる。

本実践では、国語科にしぼったものとなったが、児童の「言葉の力」を育成するためには、国語科のみに留まらず、他教科の学びや学校生活、さらには日常生活にも生かしていくことが本来のあるべき姿だと考える。そのため、今後は、国語科で習得した「言葉の力」を、他教科等においても幅広く生かしていくことができるように、他教科等との関連を意識したカリキュラムや教育課程を編成していくことも視野に入れ、実践を重ねていきたい。